

1960年代初期南アフリカ共和国における 異人種間接触の試み： 弾圧期におけるある白人女性達の活動

上 窪 一 世

**An experiment of Multiracial contact in South Africa in the early
60s : Some activities by white women under the suppressive era.**

KAMIKUBO Kazuyo

目 的

本稿では1960年代の南アフリカ共和国（以下、南ア）において、主として「白人」¹「女性」からなる運動体であるブラック・サッシュ²の活動を取りあげ、彼女達が自らとは異なる人種となぜ、どのように接触の機会をもち、それがどのような影響を彼女達に与えたのかを考察する。具体的には1960年代初めに南ア最大の都市であるヨハネスブルグで展開されたExperiment in Multi-Racial Consultationとそれを契機に行われたフォーラムについて考察する。

詳細は後述するが、50年代から60年代の初めにかけての時期はアパルトヘイトの根幹となる法律が作成、整備され、政府による弾圧が強化されていく時期である。それは生活の様々な場面において政府の規定した人種集団を超えて、対等な一個人としての接触をもつことが

¹ 南アにおいて「白人」は必ずしも一枚岩ではない。また、政治的信条も当然ながら個人差によるところも大きい。しかし、本稿で敢えて個人の差異を念頭に置きながらも「白人」と総称するのは、この総称によって本人の思想、信条と関係なく南アにおいて優先的な諸権利を保障される集団として分類され、機能していたことを重視するためである。

² ブラック・サッシュは、1955年に主に都市部の白人中流階級的女性を中心に結成された運動体である。長年反アパルトヘイト運動を展開してきた。現在もNGOとして活動を継続している。当時、社会的議論を呼んでいた上院法の改正に対しての憤りが結成の出発点となっている。政府は南ア連邦を改正し易くするために政府寄りの議員を獲得すべく選挙法である上院法を改正しようとしたのである。概要については拙稿を参照のこと。「1980年代南アフリカ共和国における反アパルトヘイト運動のミッシングリンク：「女性」というくくりがもたらしたもの——『ブラック・サッシュの経験から』」アジア・アフリカ研究 第3号, vol.41 no.3, 44-61ページ。

困難になっていったことを意味する。こうした弾圧は、政府に対する抵抗運動にも向けられた。アフリカ人にいたっては集会すら禁じられ、抵抗運動の停滞期とも言われる時期である。このような時期に異人種間接触をいかにして持つかということは、多くの困難がともなったと想像できよう。

以上のような時代状況から当時「マダムとメイド」に象徴されるような労使関係を除いては異人種間の接触自体が難しかった時代に、Experiment in Multi-Racial Consultation という試みは、それまでの活動のなかでかつてない規模で非白人集団との接触があった事例としてブラック・サッシュの会員自身が言及している活動である³。その意味で労使関係のような非対称な関係ではない関係を模索した接触例といえる。また、この試みを契機に行われたフォーラムはExperiment in Multi-Racial Consultationで自分達の得た経験をより発展させようとしたものであり、次なる活動の方向性に対する影響を知ることができよう。

以下では、特に人種間関係に関わる法律、政策の形成過程を交えつつ当時の南ア社会を説明した後に、これら2つの活動を考察していく。

国民党政権の誕生と体制の整備

1948年に国民党の単独政権が誕生し⁴、制度としてアパルトヘイトは構築されていった⁵。まず、マラン政権下(1948～54)において49年に異人種間での婚姻を禁じる「雑婚禁止法」、50年に異人種間の性的交渉を禁じる「背徳法」、国民全員に所属する人種への登録を義務付ける「人口登録法」、人種別に居住地を定めた「集団地域法」、といった法律が作られた。次のストレイダム政権(1954～58)では、56年に「産業調停法」を改正して人種混合の組合を禁止し、職種の制限が行われた。また、同年にアフリカ人の集会を禁止する「改正原住民法」が制定された。

その後ストレイダムの死亡により首相に就任したフェルヴールト⁶が(1958～66)その後の南アの「分離発展政策」を確立させたといわれている。フェルヴールトはマラン政権下で原住民問題担当相を務め、「アパルトヘイトの設計者」といわれた人物である。彼は当時高まりつつある国際的なアパルトヘイトへの批判に応じて「全面的アパルトヘイト」構想を披露

³ Wits Historical Archives G19-1

⁴ 国民党はアフリカーナーナショナリストを基盤とする政党である。それまで、1910年の南ア連邦誕生後もイギリスの支配を快く思わないアフリカーナーナショナリスト達にとっては、イギリス的なものを疎外していく一歩としても単独政権は大きな意味をもった。

⁵ しかし、これ以前からのイギリスによる植民地政策、1910年の連邦制移行後の1913年「原住民土地法」制定など分断政策はすでに始まっており、1948年以前からの連続性には留意しなくてはならない。48年がアパルトヘイトのメルクマールとしての意味をもつのはアフリカーナーナショナリズムに支えられた国民党がこれ以降単独で政権を握っていき、慣習ではなく法律、制度の整備、拡充によって国体としてアパルトヘイトが構築されていった点にある。

⁶ 1966年、国会内でギリシャ系白人によって暗殺された。

した。それは議会で次のような発言となって披露されている；

「南アフリカは現在、平等の権利をもつ多人種社会を選ぶか、全面的アパルトヘイトを確立するか岐路に立たされている。…政府は白人とアフリカ人が、それぞれの地域で、その能力に応じて発展する政策を採用する」⁷

この構想は、アフリカ人地域内でアフリカ人に「自治権」を与えて「独立」を付与するという「分離発展政策」へと展開された⁸。そして、この議会での発言が行われた1959年、「バンツール自治促進法」が制定された⁹。このように着々と個人間の接触を阻む法律、政策がとられていった。こうした政策は、57年のガーナの独立を先駆けとし、60年以降のアフリカ大陸における独立ラッシュを想起すれば、いかに当時においても国際潮流に逆行する動きだったかということが分かる。

このような徹底した法律、政策の作成、整備によるアパルトヘイト体制の強化は、当然ながら抵抗運動を呼び起こした。しかし、当時の運動の中心的存在であった共産主義者を弾圧するために50年には「共産主義弾圧法」を制定するなど運動の取り締まりも強化していった。さらにこの時期、抵抗運動側にとっての最大の痛手は、1960年3月21日に起きたシャープビル事件であった¹⁰。この事件は政府が出した移動を制限するパス（証明書）の携行を義務付ける規則に抗議するため、デモを行っていたアフリカ人に向かって警察が発砲し、多数の死者を出した事件である。政府は、非常事態宣言を発令し、事件を鎮圧するために軍隊、警察を動員したほどだった。このデモ抗議を行った中心的存在であった「パン・アフリカニスト会議（PAC）」と当時の反アパルトヘイト運動の中心的存在であった「アフリカ民族会議（ANC）」¹¹は、共に非合法化され表立った運動ができなくなった。

このように60年代に入ったところでそれ以前に辛うじてあった人種を超えた運動も停滞期を迎えることとなった¹²。

⁷ 下院議事録99 1959年1月27日。林 晃史編（1987）『南アフリカ——アパルトヘイト体制の行方』アジア経済研究所、27ページから再掲。ここで興味深いのはこの構想が「個々の文化を尊重する」というスタンスに表面上はなっているということである。アパルトヘイト制度ではその後もこの姿勢を公的には貫き、実質的な構造的差別が展開されていった。

⁸ これらの「自治」、「独立」といった言葉は、国際的なアパルトヘイト批判をかわすための政策のひとつであって形式的な意味しかもたなかった。

⁹ その内容は次の通り；1) アフリカ人に代わって選出されていた白人の議会代表の完全廃止 2) アフリカ人地域を言語、文化に基づいて10の地域に区分する。3) 将来、各地を「自治領（バンツースタン）」にし、順次独立を与える。なお、バンツースタンという名称は70年代にホームランド、バンツールホームランドに改称された。

¹⁰ 当時国際的な非難を呼び起こし、世界に南アの実情が知られるところとなった。なお、1966年、国連によってこの日は世界人権デーに制定された。

¹¹ この時の非合法化は1990年に合法化されるまで続いた。ANCは、1994年の新政権以降、現在与党となっている。

¹² 50年代前半から半ばにおいては、1952年にANC主導で行われた非暴力による抗議キャンペーンがきっかけとなり、ANCや「南アフリカインド人会議」、「カラード人民会議」、「民主主義者会議」（白人の組織）といった様々な人種による組織が、結集して「会議同盟」がつけられた。また、この会議同盟が中心となって「人民会議（Congress of People）」を召集し55年に「自由憲章」を起草するなど運動の盛り上がりを見せた。

Experiment in Multi-Racial Consultation¹³

前節で述べてきた時代背景から当時、雇用者と非雇用者といったような特定の関係を除いて異人種間の一個人としての対等な立場での接触は難しかった。本節ではそうしたなかでは例外的ともいえる接触の機会として1960年9月ヨハネスブルグで開催された Experiment in Multi-Racial Consultation を考察する。

まずは、この試みを行うにあたってどのような動機からブラック・サッシュの会員はこのような機会を持つに到ったのだろうか。報告書では経緯に触れる前にそれまでの政治に対する自分達の姿勢を次のように記している。

私達会員の多くが以前は政治にほとんど、あるいは全く関心を持たない女性でした。そこで私達のリーダー達は、もし、私達が自らの目的を誠実にかつ私心なく（客観的に）遂行しようとするなら、この国とこの国の政治について正確な知識を自ら身につけなければならないことにすぐに思い至りました¹⁴。

ここには政治に関心や知識を持たなかった自分達が政治に関心をもつことの必要性を実感したことが述べられている。また、報告書にはその後、実際に自ら勉強会で学んだことを基盤に政府への抗議活動を展開していったことも述べられている。さらにこの自己教育を通じて得た成果のひとつは、「アパルトヘイト法の強化と我々を異なる人種ごとに分断しつくす（division and sub-division）ことによって、個々のコミュニケーションが破壊されている」¹⁵ ことに気づいたことであつたと指摘している。こうしたことから「総じて南アフリカ人は現在、自らの集団以外の人々の生活、思想、感情といったものにひどく無関心であつて、我々は南アフリカにとって最も火急に必要なのは、人種間で膝を突き合わせることであると信じる」¹⁶ という結論に到った。

そのようななか、1960年の非常事態宣言中に全国のブラック・サッシュの会員が拘留中の人々の身内を救済するために募金活動などを手伝った。その際、「かつてないほど非ヨーロッパ人¹⁷と親密な接触」¹⁸があつた。この経験からトランスヴァール地区¹⁹の会員の一部に、もっとアフリカ人女性の日常生活や問題について知りたいという要望がでてきた。それが、ヨハネスブルグでの Experiment in consultation に結びつくことになった。

¹³ Wits Historical Archives G19-1。資料が作成された正確な日付が記入されていないが、文中から61年4月以降から62年にかけての時期に書かれたものと推察できる。以下ではこの資料を中止に考察する。

¹⁴ ibid.

¹⁵ ibid.

¹⁶ ibid.

¹⁷ 結成当初の会のニュースレターなどや60年代の他の資料をみても当時彼女達が「白人」という表現ではなく、「ヨーロッパ人」という表現をしているのが目に付く。ヨーロッパの出自をもつかどうかというのが、当時の彼女達の自己規定のひとつだったといえ、それはまた、同じ「ヨーロッパ出自として」社会の問題を解決できる道を探ろうとアフリカーナーに呼びかけていた姿勢にも通じる。

¹⁸ ibid.

¹⁹ 行政府でもあり商業都市でもあるヨハネスブルグを中心とするブラック・サッシュの拠点のひとつ。

最初の会合は会員のモリス (Elin Morris) を中心に進められ、1960年9月から10月にかけて3日間にわたって開かれた。会の目的は「都市部に住む様々な人種の女性達の中に話し合いのささやかな架け橋を提供すること」²⁰と「一般の女性にとって関心のある日常のさまざまなことを扱う継続的な組織化された話し合いの場を実現すること」²¹であった。

多くの女性に呼びかけたが、50人余りの参加者のうち半数が「ヨーロッパ人」であり、アフリカ人女性がほぼ半数だった。そこに集った女性達は、看護師、教師などの専門職から主婦、母親といった様々な背景をもった女性達であった。いずれの参加者も組織の代表といったことではなく、あくまで個人としての参加であった。

会合は3つのセクションに分かれて行われた。それぞれの議題は、「収入と雇用 (Income and Employment)」, 「親と子 (Parents and Children)」, 「教育 (Education)」であった。「収入と雇用」のセクションでは、生活費、生活水準、働く女性などをテーマに議論された。「親と子」のセクションでは、老人もその対象に含みつつ青少年の非行問題などが取り上げられた。「教育」のセクションでは、才能をいかに伸ばすかや余暇の過ごし方といったようなことが話し合われた。

中心となって会合を設定したモリスによれば、和やかで気さくな雰囲気で行えたと表している。また、運営側としてはこの会合に政治色を持ち込まないと決めていたが、実際には政治がそれぞれの人種の抱える問題に大きく関係している以上、議論のなかで言及される場面もあったという。

この会合の成果ということではブラック・サッシュの会員自身がまず、自分達を含め参加した「ヨーロッパ人」女性達が、アフリカ人女性達が自分達が思いもしないような行動の制限を受けた劣悪な生活に対処しなければならないかを知った点があげられている。一方、アフリカ人女性達に肌の色や背景がなんであれ、全ての女性は似たような家族や家庭の問題を抱えていることを知ってもらえたことも成果として述べている²²。こうした認識には当時、この会合を開催したメンバー間に「女性」という属性を共通項に互いの分断を超えるきっかけとして受けとめていることが伺える。

資料の制限上アフリカ人女性の側の声もブラック・サッシュ側の感想というフィルターを通してでしか分らないが、最終日には参加したアフリカ人女性から中心的になって準備を行ったモリス氏に感謝の意をこめて花束が贈呈された。親和的な「ヨーロッパ人女性」達と出会う機会を与えてくれたことへの感謝だったという。少なくともそこにささやかな試みへの満足感が双方に生まれていたことが指摘できる。内容の充実さというよりもこうした試み自体に意義があったといえる。

この1960年9月末から3日間にわたって行われた試みの後、このような人種の枠を超えた

²⁰ ibid.

²¹ ibid.

²² ibid.

定期的な会合を望む声を人種に関係なく多くの人々から受けたとして、トランスヴァール地区では「多人種参加フォーラム (Multi-Racial Forum) を開催することにした。全ての女性のみならず男性や様々な生活背景を持った人の参加を意図したものだ。当時、このような試みは先の会合同様、あまり行われていなかった。

このフォーラムは 1961 年 4 月 15 日にヨハネスブルグのラインオルト・ジョーンズ記念会館 (Rheinallt Jones Memorial Hall) で開催された²³。開催するにあたって、多くの招待状を送付したが、「非ヨーロッパ人労働者を雇っている多くの雇用者や保守派の代表、政府寄りの人など我々が友好的協力関係を望んでいた人々には招待状は受けとれられず、あるいは返信さえしてもらえなかった。この点に関しては非ヨーロッパ人のほうが大変丁寧だった」²⁴とあり、反応に温度差があったことが述べられている。

フォーラムではハーヴェイ (R.N.Harvey) 氏がヨハネスブルグの統計的、経済的調査を示しつつ全ての人種の生活と福祉に白人は責任を負っていると述べた。同時に当時の経済発展は全ての人種の協力によって達成されたものであることも指摘した。その他にもアフリカ人を代表してピチェ (G.M.Pitje) 氏が主に、彼らの暮らしに大きな影響力を及ぼしているパス法と「自治制度 (Bantu Authorities System)」について語った。インド系の代表としてブリア (R.A.Bhulia) 氏がウィットウォーターズランド地区のインド人に様々な意味での「機会」というものがほとんどないことを指摘した上で「集団居住法」による制約を語った。カラードからの代表としてはベック (Godfrey Beck) 氏が「集団居住法」と「職業制限 (job reservation)」について語り、特にヨハネスブルグにおいて白人との余りに格差のある居住状況について述べた。

このような自分達とは異なる集団の生活状況を聞き、ブラック・サッシュの会員はどのような感想をもったのだろうか。最も印象的だった点として、ひとつには、招待した「非ヨーロッパ人」の彼らがこうした機会を存分に生かして自分達の抱える困難さを必死に訴えようとする「熱意」をあげている。また、「我々のこの豊かな土地において非ヨーロッパ人が素晴らしいもののおこぼれで満足しなければならなかったという紛れも無い事実」²⁵もあげている。同時に報告書には代表で語った非ヨーロッパ人達が、自らの演説中も聴衆からのコメント時にも控え目な態度で臨んではいたものの彼らのなかで我慢のできない沸き上がる怒りがみえてとれたことも記されている。彼らが要求していることは、自分達を「我が多人種社会の利益と責任とにおいて公平な分け前のある人間としてまた良き隣人として認めること」²⁶であった。また、報告書には彼らが正義を望みつつ白人の善意と導きを頼みとしているとも述べられている。

²³ 報告書によればヨハネスブルグにおいて多人種が集える数少ない場所のひとつだったという。

²⁴ *ibid.*

²⁵ *ibid.*

²⁶ *ibid.*

「白人の善意」「導き」といったこれらの言葉が実際に非白人の演者達から発せられた言葉なのかあくまで彼女達の印象、感想なのか報告書からは判別できない。その上で言えることは、これらの言葉が発言されたものだとしても彼女達の感想だとしてもいずれにしても彼女達の心に残った認識として重要であるということだろう。そういう視点でいくと、様々な演者の訴えを聞き現状を知るにつけ、「白人」としての自らの責務を意識しつつあったといえるのではないだろうか。

フォーラムの開催中には、幾度となく全演者から非人種的な全国会議の開催を呼びかける声明をこのフォーラムから出そうという要求も出た。ブラック・サッシュは長年この問題に取り組んでいたものの声明の採択を許すわけにはいかなかった。というのもそうした採択をしないことを条件に招いた一般参加者もいたためである。

このときは声明を採択するという強い姿勢を見せることはなかったものの、報告書のなかでブラック・サッシュの会員自身はこのフォーラムを通じて多くの市民の「声」が極端なまでに不正に奪われていることに強い印象を受けたという。そして、これらの問題に実践的かつ公平に解決するにはあらゆる人種の代表からなる話し合いしかないということを強く思うと述べており²⁷、あらゆる人種がいかに相まみえ話し合うかについて意識している。また、このフォーラムと先駆けて行われた女性達の会合という2つの経験からブラック・サッシュの会員達は、「そうした話し合いのための時間がまだあると確信した」とも述べている²⁸。

こうした意識は後日、次なる行動となって表れた。トランスヴァール地区のいち支部である南トランスヴァール地区の会員は市庁舎の階段にポスターを持って立ち続けるデモを行った。ポスターには南ア全体で話し合いを求める声が高まっていること、正義が全人種参加による国民会議を求めているといったことが掲示されていた。こうしたデモをこの市庁舎だけでなく後日、市の様々な場所で夜毎行った。

おわりに

以上2つの試みは、拘留者家族の支援という状況に関わったことを出発点としている。それまで55年に組織を結成した当初は、南ア連邦法を改正し易くするための法改正に対する政府への憤りから出発した活動であった。しかし、改正を阻止することはできず活動の方向性を模索する時期に、このような具体的な個人への支援という接触を通じてアパルトヘイトの被害実態を垣間見たことは、彼女達にとって大きな意味をもった。

政府によりアフリカ人は集会さえも開けない状況になり、人種を超えた個人間の自由な接触が阻まれるなか、何より彼女達を動かしたのはまず、その垣間見えた状況から発せられた

²⁷ ibid.

²⁸ ibid.

「相手を知りたい」という願望であった。それをどのような形で実現するかという段階では、物資や金銭などの直接的な支援という形ではなく、まず、「実際に会って話す」ことから始めた。その際に、彼女達を結び付けたものとして同じ「女性」としてという意識があった。ただ、そこには当時の「女性」に対する一般的な意識を超えるもので結ばれていたとは言い難い。つまり、「女性」という意味が、「妻」、「母」という意識とかなりの程度オーバーラップした未分化の状態である²⁹。当時の一般的な意識を超えるものではなかったためか、その意識を深めるという方向で活動を展開していく動きにはならなかった。この会合では、それまで実態をもたず、想像すら難しかった互いの生活状況を具体的にしかも、直接「知る」ことができたというのが大きな成果だった。

この「知る」こと、つまり、対象に関心を持ち続けかつ具体的な情報を得ていくことの重要性を痛感した彼女達はそれをフォーラムという形で実行した。このフォーラムの開催に到っては、自分達と同様に関心をもってほしい対象を性別に関係なく広げていくなかで彼女達のなかに今度は「白人」としての責務という意識が芽生えてきていた。ただ、この段階では「白人」として自らが被る諸権利をどこまで意識していたかは分からない。特に経済的な格差まで踏み込んでいくという段階ではなく、これも「白人」の責務として実態を知り、それをより多くの人と共有したいという段階であった。いわば、「接触」と「知る」ことを軸にこの時期の活動を展開していったといえよう。

こうした姿勢が後に彼女達の活動の特異性となるアパルトヘイトの被害者の実態把握とその支援という活動展開とどのように関連していくのか今後の課題としたい³⁰。

(かみくぼ かずよ 本学非常勤講師・英語)

²⁹ 彼女達のみならず、南ア社会一般において人種などに関係なく、母でもなく妻でもなく一人の自立した人間としての女性という意識は、80年代になってから共有される意識であった。

³⁰ ブラック・サッシュはこれらの試みと同時期からアパルトヘイトの被害者である主に都市部のアフリカ人女性の支援を行うアドバイス・オフィスを全国に展開していった。この活動の中心は裁判弁護などの法的支援であったが、状況に応じて資金援助なども行った。